



WJF 日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信



日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2019年3月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://wjf4464.la.coocan.jp/>

発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集 外山喜雄



サッチモのスピリットは永遠に

Satchmo's Spirit Lives on Forever

1971年7月サッチモ逝去、その時ニューオリンズの若者たちが掲げていたメッセージ

ルイ・アームストロングが亡くなって48年になる。1971年7月6日朝、現在サッチモ・ハウス博物館となっているニューヨークの自宅での突然の、しかし安らかな死去だった。葬儀は9日、NYで盛大に執り行われたが、その翌日、故郷ニューオリンズのスラムの人々が自発的に立ち上がり、2日間にわたってユーレカ、オリンピア、タキシード他ジャズのブラスバンド総出でパレード、市役所前の式典も持たれ故郷が生んだ『巨人』に街中が敬意を示した。

しかし当時は、黒人のプライドを前面に押し出した、マイルスやコルトレーンの音楽に代表されるような、反体制ジャズ全盛の時代で、愛に満ちファンを楽しませ、一生懸命笑顔を振りまく『サッチモ』は、白人や体制に媚び迎合する『アングルトム』として非難されてもいた。巨人の死を悼む反面、ルイの『愛と融和と統合』のハートが正しく評価されない時代でもあったのだ。ルイは、晩年黒人からも、白人からも白い目で見られる時を過ごしたのも事実だ。

そんな中、当時ニューオリンズで武者修行中だった私たちは、黒人のスラム



ム、トレメ地区から始まった『サッチモを偲ぶ故郷のイベント』を目撃、取材した。その中でも忘れられない光景がある。スラムのヤクザな、ちょっと危なそうな黒人の若者たちがフラッグを掲げて行進していた光景だ。

その旗には『Satchmo's Spirit Lives on Forever』

サッチモの精神は永遠に、、、とあった。

いま、蘇るサッチモ……ニューオリンズの若者たちの掲げていたメッセージは本当になった。



1971年7月10日 ニューオリンズでのサッチモ追悼パレード
撮影 外山喜雄 恵子

まもなくWJF発足 25 周年

「いま、蘇るサッチモ！！」

感謝

1994年7月6日、サッチモ没後23回目の命日に発足したWJF日本ルイ・アームストロング協会は、皆様の温かい応援に支えていただき、まもなく活動25周年を迎えます。すべて皆様会員並びにご協力者、WJF理事スタッフの皆様他多くの方々の応援に支えられて実現させていただいた奇跡のような出来事です。

会報、例会、サッチモ祭、銃に代えて楽器を、ニューオリンズ・ハリケーン支援、NYサッチモハウスとNOジャズ博物館支援、東日本大震災後ニューオリンズから届いた楽器、そして震災の悲劇を乗り越え、奇跡の相互訪問と交流を実現することができた日米の子供達。

地方から静かに応援を続け下さっている方々もいらっしやいます。永年私たちの夢に皆様の夢を重ねていただき本当にありがとうございます。 外山喜雄、恵子

りが今年で15年目、秋の「新宿トラッドジャズフェスティバル」が18年目と、日本有数のオールドジャズの祭典となっている。こうしたジャズ祭を支えているのは、若き日、学生時代オールドジャズに情熱を燃やした中高老年の主催者、ジャズファンとプレイヤーの皆さん。そして影響を受けてきた、新しい若い世代のプレイヤー達だ。

よみがえる大学対抗バンド合戦

永谷さんの活躍は新宿ジャズ祭にとどまらない。ご自身が経営する居酒屋チェーン「呑家」(どんじゃか)の隣に居酒屋ライブ「銅鑼」をオープン、毎週末トラッドジャズのライブの場を提供されている。

1960年代TBSラジオの人気番組で全国放送された大学対抗バンド合戦。そこまでとは言わないが、新宿トラッドジャズ祭の盛況は、あの時代のバンドが40、50年たって復活し、また、20歳そこそこの若者も多くが刺激を受けて『バンド合戦』に参加し始めているかのようだ。

浅草を日本のニューオリンズに！ 富永照子 女将さん大奮闘

日本のジャズ発祥の地の一つでもある浅草。浅草おかみさん会の富永照子さんが、1980年代当時寂れていた浅草六区を何とか復興させようとアメリカを視察、バーボン・ストリート

が浅草の雰囲気だと直感し、当時の常盤座にニューオリンズからルイ・ネルソンのバンドを招聘、今年で33回目になる浅草ニューオリンズ・フェスティバル開催を続けて

いる。女将さんはライブハウスも必要と奮闘、ニューオリンズスタイルのピアニスト東海林幹雄さんのブッキングで、みごと「浅草ハブ」を日本一のニューオリンズ・ジャズのメッカに育て上げた。「浅草ハブ」がなかったら「東京トラッド」の現状は全く違っていただろう。女将さんは



私たちのホーム「浦安ハブ」のジャズライブも鶴の一声で実現してくれた。またトラッドジャズのライブでは、多くのプロ、アマチュアが出演する福本希高マスター(上の写真右端)の西荻「ミントンハウス」

が、昨年40周年を迎えている。大変嬉しいことに、永谷さん、お女将さん、福本さん、皆様が会員として日本ルイ・アームストロング協会を支えてくださっている。



ニューオリンズ、デキシー、スウィング、、、 若者にまで広がるオールドジャズ隆盛を考える 復活 古き良き時代のジャズ

51年前のニューオリンズへの旅立ち、サッチモ没後1

0年の1981年に東京駅大丸屋上で「サッチモ祭」をスタート、そして1994年からのWJF日本ルイ・アームストロング協会の活動。

皆様と共に歩んだこの永い期間を経て、今、中高年パワーと若者世代の熱気が結びついた、ニューオリンズ、デキシー、スウィング、ゴスペル等オールドジャズの隆盛、そしてリバイバルの時を迎えているように感じている。

毎年2回、新宿三丁目界隈をスウィングさせている新宿ジャズ祭、永谷正嗣さんとスタッフのご努力下、毎年春開催の「新宿春の楽しいジャズ祭り」



34年開催 2014年に幕を閉じたサッチモ祭



5月11日新宿文化センターで開催。問い合わせ: 03-3341-5009

西から来たトラッドジャズブーム

先駆者ニューオリンズ・ラスカルズとODJC

私達や先輩の世代は、河野隆次さん、油井正一さん、野口久光さん他多くのジャズ評論家の方々に大きな影響を受けた。東、つまり東京発信のジャズブームだった。しかしラジオ関西のドン、末広光夫さんもラジオ番組を持ち、関西のトラッドシーンに大きな影響を残した。早大ニューオールリンズ・ジャズクラブ時代からの仲間お二人、河合良一さん(cl)、木村陽一さん(drm)が1961年



ニューオリンズ・ラスカルズの皆さん
前列右から、木村さん、河合さん、川合さん

に結成したニューオリンズ・ラスカルズ、そして末広さんとも広がった ODJC(オリジナル・デキシーランド・ジャズクラブ)の関西での華々しい活動は、その後の‘西からのトラッド・ブーム’をもたらし、東京での多くのニューオリンズ・ジャズバンド誕生に影響を与えている。



全日本デキシーランド・ジャズ・フェスティバル

ODJCはジャズ祭でも先駆的な、全日本デキシーランド・ジャズフェスティバルを1966年に開始、その流れが現在の神戸ジャズストリートを生み各地のジャズ・ストリートの先駆けとなった。横濱ジャズ・プロムナード、仙台定禅寺、宇都宮ミヤジャズイン、新宿、阿佐ヶ谷、と今やジャズストリートが全国各地で開催されている。

東では1972年、行田よしおさんが第1回全日本デキシーランド・ジャズフェスティバルを神田共立講堂で開催、南里文雄さんほか100名を超えるジャズマンが出演した。行田さんは後に関東デキシー組合活動を、有田昭一、野口久光両氏とともに広げ、デキシー界に大きく貢献した。プロのデキシーランドジャズ界は今も元気いっぱい。新春恒例のデキシーランド・ジャズ・ジャンボリーには毎年1500人を超すデキシーファンが駆けつける。(7pに関連記事)

トラッドジャズ界では、やはり関西に刺激された水道橋スウィングのマスター柴田栄一さんの日仏会館コンサートに影響を受け、私たちは1981年に『サッチモ祭』を

開始、西から来たトラッドの波は、今日の新宿ジャズ、ジャズひな祭り等で中高年から若いミュージシャンまで、女性プレイヤーや学生さんまでを巻き込んだ、一種のオールドジャズ・ブームの到来にまで繋がっている。

ラスカルズのお世話になった ニューオリンズ修行

私達夫婦が1968年、移民船でニューオリンズへ飛び出すにあたって、1963年からのジョージ・ルイス、ルイ・アームストロング、そして続いたエリントン、ベイシー、ハンプトン他そうそうたるジャズの巨人たち来日の影響は大変大きかった。

1ドル360円、海外渡航者年間30万人の時代、まったく右も左もわからない中、大学の先輩でもあったラスカルズの木村陽一さん、河合良一さん、そしてバンジョーの川合純一さんに大変お世話になったことを忘れることは出来ない。すでに1966年米ツアーを経験していたラスカルズのアメリカの人脈を親切に教えていただき、当時留学中だった木村さんからエアーメールで頂いた、渡米について数々の忠告と助言を今だに忘れない。

今、お世話になった木村さんのご子息の木村おうじ君と演奏する機会があることは、本当に嬉しいことだ。また、私達より一足先にロス、ニューオリンズに住んでいた、ベースの荒井潔さんからのエアーメールも残っている。彼とは、バーボンストリートのアパートをシェアし1年ほど同居、階下のクレオール料理レストランの庭先で‘1日2食のギャラ’で演奏した。その後、荒井さんが武蔵高校時代サッチモとジョージ・ルイスの日本一のコレクター佐藤修さんと同級、ジャズ愛好の仲間だったことを知り、また起こった『サッチモの悪戯』に感激している。

若者たちにとっては新しいジャズ ♪ Everything Old is New Again ♪

今、新宿ジャズでも各大学のジャズサークルでも、ニューオリンズ、デキシー、スウィング他オールドジャズが若者を惹きつけている。この傾向はアメリカやヨーロッパでも顕著で、技巧的になり難解になりすぎたジャズが、楽しいみんなで楽しむジャズへと戻っていくようだ。

洗足学園音楽大学で教鞭をとるクラリネット奏者、谷口英治さんは、こう言う。「若者たちにとってトラッドは、先端のモダンジャズ同様、新しい音楽なんです！」。トラッドジャズには明るい未来が待っているようだ。



立役者浅草の女将さん
富永照子さん



ジャズライブを開催する浅草と浦安
イングリッシュ・パブ ハブ

未来へ 若者達とともに蘇るサッチモ

早稲田大学 ニューオルリンズ・ジャズクラブ

長いトラッドジャズの歴史の中で‘東京トラッド’の伝統を支えている多くの人々が、学生時代ニューオルリンズやデキシシー系のバンドで演奏した人々だ。中でも早稲田大学ニューオルリンズ・ジャズクラブ、通称『ニューオリ』OBは、現在の状況につながる活躍を各所でしている。世界で唯一の大学公認のトラッドジャズ・クラブ。現在でも70名近い部員を擁していることが驚きだ。

外山喜雄・恵子夫妻は『ニューオリ』の出身、1968年にニューオルリンズへジャズ武者修行に旅立ち、ふたりのジャズ人生がスタートする。

早稲田大学ニューオルリンズ・ジャズ・クラブの発足当時を、ニューオルリンズ・ラスカルズのリーダー、河合良一氏（初代創設者のひとり）は以下のように記録に残している。-----1958年6月、マネジャー西野直俊氏の尽力で「早稲田大学ニューオルリンズ・ジャズ・クラブ」が大学公認団体として発足。公認発会記念として「早慶ディキシシーランド・ジャズコンサート」を大隈講堂にて開催（6月24日）

そして同クラブが公認団体となった大きな要因は、クラブの顧問を教育学部英文学教授、西江定先生にお引き受け頂いたことと河合氏は述べている。外山喜雄・恵子夫妻結婚のお仲人はその西江定教授ご夫妻だった。

創立当初から10数年は部員数40名前後、女子部員は10%前後という構成であったが、現在（2019年3月時点）で部員数67名、うち女子部員が40名、部内の演奏グループはふたつのレギュラーバンドを含んで12バンドがジャズ研究にいそしんでおり、恒例のニューオルリンズ合宿も本年2月に実施された。



日本ルー・アームストロング協会主催のサッチモ祭および新宿トラッドジャズフェス

ティバルには数多くのニューオリOBバンドと現役学生バンドが出演、現在世界の大学で公認のトラッドジャズクラブは早稲田大学ただひとつという中で意気軒昂である。中にはプロミュージシャンとして活躍しているOB・OGも数多くおり、またレコード業界他音楽業界で活躍するOB・OGも多い。（写真上、2012年、第32回サッチモ祭に出演したニューオルリンズからの若者たちと、ニューオリ女子部員達。現在新進女性クラリネット奏者として活躍する田村麻紀子さんの顔も。後列右端）

山口義憲記

洗足学園音楽大学 ジャズフラスガンボ！

そして音楽大学にも新しいジャズの波が起こっている。数々の有名ジャズメンが教鞭をとる洗足学園音楽大学で教授を務められた、モダンジャズ・テナーサクスの名手中村誠一さんがニューオリンズの音楽にほれ込み、2009年同大学でニューオリンズスタイルのブラスバンドをスタートさせた。「ジャズ・ブラス・ガンボ」と、名物料理にちなんだバンド名も命名。現在は、やはり名クラリネット奏者の谷口英治さんが40名ほどの音大生たちを指導している。

毎年恒例の『ガンボ』ワンマン・ライブが都内のジャズライブ「Bb」で開催された。はちきれんばかりの若い男女の音大生が、心から楽しそうに「ザッツ・ア・プレッティー」、「バーボン・ストリート・パレード」、「タイガーラグ」、「ハイ・ソサイティー」、「アイス・クリーム」をスウィングし、合唱し、まさに谷口氏が言うように『彼らにとって新しい音楽』。感激する光景だった。音楽大学では、昭和音楽大学もアート・マネージメント・コースの学生さん、田中玖実さんが昨年『デキシシーランド×SHOWA 祭りだ！ジャズだ！デキシシーだ！』を企画制作、嬉しい若い世代の関心の高まりだ。

写真上左：『ガンボ』の創設者中村誠一さん（左）と、谷口英治さん（右） 写真上右：ガンボのトランペッター末村勇木君、サッチモのニューサイドに挑戦！ 写真下、ジャズジャズブラスガンボの若者達



ニューオルリンズで音楽活動を続け活躍する人々

プリザベーション・ホール週数回出演の‘ニューオリOB’ピアニスト渡辺眞理さん（右から3人目）、同トロンボーン菊池ハルカさん（右端）お世話になったラスカルズ、木村陽一さんのJRおうじ君、女性ドラマー、まゆみさん、菊池さんのご主人、ピアニスト辻‘Z2’佳孝さん。

トラッドジャズの明日を担う若者達だ！！



「自筆の手紙と音楽、 アートが示すルイ・アームストロング」

NY タイムス日曜版 アート&レジャー欄のトップ記事に

ルイが1943年から他界した1971年まで、愛妻ルシー夫人と暮らした家はNY市の史跡に指定され、2003年ルイ・アームストロング・ハウス博物館として開館し一般に公開されている。昨年、黒人文化の支援に力を入れるファンドⅡ財団の寄付300万ドル(3.3億円)により、サッチモハウス貴重な資料のデジタル化が完了し一般からアクセスできるようになる、...という素晴らしいニュースが11月18日付NYタイム스에掲載された。

ハウスには、ルイが演奏旅行した世界の記念品、19



65年グラミー賞を受けたハロドーリーの受賞楯等と合わせ、私的な会話やルイ

のお好みの音楽、練習風景を録音した500本以上のリール to リールの録音テープ、多くの手紙や写真等が残されている。海外のファンからの手紙の中には、



サッチモとテープレコーダー
ハウスには多くのテープが残され

『ミスター・サッチモUSA』の宛名だけで届いた手紙もあり、ルイがいかにか世界的に有名だったかを物語る。

人種をつないだサッチモ大使

昨年公開された『アメリカン・ミュージック・ジャーニー』。そして今年5月には、ウイントン・マルサリスが音楽を担当、ジャズの創始者伝説のコルネット奏者バディ・ボールデンの生涯を取り上げた映画『ボールデン』が米で公開される。『ミュージック・ジャーニー』は、メジャーなヒップホップのスターが、アメリカ音楽のルーツとしてのサッチモを再認識するドキュメント。サッチモが果たしたもっとも重要な役割、音楽を通してのアンバサダー！について、監督や主役のアロー・ブラックが言い当てています！

『1920年代後半、当時有色人種ということで受け入れられないであろう一般家庭に、彼のレコードは入り込んだ

のです。黒人の未来を変えるにあたって非常に重要な出来事だったんです。』

『アメリカのほとんどは、依然として人種問題で分離されていましたが、彼があまりに偉大なエンターテイナーだったことで、ジャズは全人種のアメリカ人に解放されました、...。』

故小泉さんの予言 いま、蘇るサッチモ

このタイトルは、1995年故小泉良夫さんが私達を応援してくださり、夕刊フジで展開してくれた大特集のタイトルでした。小泉さんが亡くなられ、今、次々と巻き起こるサッチモへの賞賛。あたかも小泉さんがサッチモと一緒に、天国から悪戯をしているかの様です！ 合掌



日本ルイ・アームストロング協会発足から一年目
夕刊フジ平成7年(1995年)8月8日から始まった大特集
『いま、蘇るサッチモ』



会員募集中

=WJF 年会費=

一般会員 (General Membership)	¥6,000
学生会員 (Student Membership)	¥3,000
賛助会員 (Friends of Louis Armstrong)	¥12,000

■会費のお振込先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行浦安駅前
支店

普通:5175119「ワンダフルワールド」

お問い合わせ:WJF 事務局

TEL:047-351-4464

FAX:047-355-1004

第66回例会 懇親クリスマス・パーティー！ 新浦安ハブで開催

レポート 理事 奥村清文 写真提供：相馬威宜、芳野法一

2018年12月23日恒例のWJF懇親クリスマスパーティーが新浦安駅前のオリエンタルホテル東京ベイの『新浦安HUB』で開催されました。早朝から、スタッフは会場の飾り付けや抽選会の景品の準備におおわらわ。会場の外にはサンタの服を着た可愛いお子様を先頭に早くから長い列。外山喜雄・恵子とセインツによるニューオリンズでのサッチモ・サマーフェスト演奏のビデオが流れる中、皆さまが入場。21日付産経新聞の地元千葉版に大きく掲載された『素晴らしきかな、サッチモ！ジャズトランペット奏者外山喜雄さん』の記事（記事を書かれた塩塚保記者ご夫妻も出席）とWJF通信 NO.101号が配布されました。



会員のお孫さん、親戚のちびっ子たちも大喜び。会員芳野法一さんのご親戚、老葉ちゃん(右で傘) 奥村理事のお孫さん明惟ちゃん(左)



元国務大臣 石井一さん、迫力一杯のジャズ・ボーカルと『名演説』が大うけ！

毎年出席される顔なじみの方々がウェルカムドリンクを手ににこやかに談笑され、いよいよパーティーのスタート。司会は、WJF通信の編集長山口義憲さん。軽妙な語りで開会宣言。昨年、日本ジャズ音楽家協会によるジャズ大賞の受賞に続き、今年、文部科学大臣表彰、日本人初のニューオリンズでの『スピリット・オブ・サッチモ・アワード』(生涯功労賞)を受賞(共同通信による配信で全国の新聞に掲載)するなど数々の栄誉を受けた外山喜雄・恵子ご夫妻が会員をはじめとするファンの方々に感謝の辞とお礼のご挨拶を述べたあと、サッチモスタイルで“オー・イエー”とにこやかに乾杯の音頭。

この通信に長い間携わってこられた理事の小泉良夫さんが7月に、また度々共演されたピアニストの前田憲男さんが12月にご逝去された事などのご報告があり、セインツによる演奏が始まりました。

クリスマスソング、デキシーランドジャズの楽しい演奏を聞きながら、飲み放題のドリンクと軽食をとり会場が盛り上がりつつある中、本日も参加の石井一先生(元国務大臣、日本ジャズ音楽協会会長)をはじめ熊本・大阪など遠方から駆けつけて下さった方々のご紹介。そしてサンタの服装に着替えたセインツの演奏をバックにいよいよ飛び入りコーナーが始まり、会員の皆さまが次々と日頃鍛えたプロ顔負けの演奏やボーカルを披露。

石井一先生も日本のジャズ界発展のために陽の当たらないジャズ演奏家達が文化庁などから表彰されるよう活動していることをエピソードを交えて話された後、政治の世界で鍛えた声で『オール・オブ・ミー』を熱唱。会場からはヤンヤの声援が、、、

そして皆さまお楽しみの抽選会。恵子さんのつたないジャンケンポンが会場の和やかな笑いを誘いながら豪華(?)景品が次々に皆さまの手にわたり始める。

ニューオリンズのお土産のグッズや参加者からご提供されたお酒やサッチモの顔の入ったTシャツやディズニーのカレンダー等々。

また、今回は、石井一先生の『グリーンの上の政治家達』、中村宏先生の『ジャズを求めて60年代ニューヨークに留学した医師の話』、



奥村理事のお孫さん、明惟ちゃん、莉紗ちゃん

若林千鶴先生の『はばたけ・ルイ』の素晴らしい著書もあり、当選した方々の嬉しそうな笑顔、笑顔。

最後に、出席者全員に会員の水越有三さんから毎年提供されるサッチモ金太郎飴もプレゼントされました。

夢のような時間が過ぎていく中、クリスマスに相応しい曲の演奏で恒例のセカンドラインがスタート。老若男女がそれぞれ傘を振り、肩を組みながら所狭しと踊りまくりクリスマスパーティーを心いくまで楽しんでいました。

中締めは、磯野博子さん(ジャズ評論家 故いソノてルヲ夫人)と佐藤修さん(元日本レコード協会会長、日本ジャズ音楽協会理事長)。『新婚時代と同じで、楽しい事はアツという間に過ぎ去ります』とユーモアなご挨拶でお開き。

今回は、小さなお子さんが舞台上がりセイントと嬉しいやり取りなどで会場が和みました。次回もご家族お揃いでのご参加、そして皆さまが良いお年をお迎えになれる事を願いながら、楽しかった余韻を胸にすっかり暗くなったホテルの会場を後にいたしました。

飛び入り参加の皆さん他：山口義憲さん、栗生清貴さん、渡辺研介さん（演奏）、松本隆一さん、安積マリ子さん、高山恵子さん、石井修さん、ブル松原さん、石井一さん。中締め、佐藤修さん、磯野博子さん、おいしいケーキを差し入れてくださった、浦安のセイント・

サポーター、高橋組：高橋良子さん、ささきようこさん、パレード、乾杯！ 山口義憲（司会）

WJf スタッフ：細川ハテミ、奥村清文、久美子、渡辺研介、小泉富子、厚之、相馬威宣、浩子、粉川いくみ、大和田浩

セイント：外山喜雄、恵子、広津誠cl、粉川忠範tb 藤崎羊一 b,tuba 木村おうじ drms



**新春デキシー・ジャンボリー 90歳を迎えられる北村英治さんをゲストに
5バンド、総勢33名 今年も大盛況で元気に開催 写真提供：相馬威宣**

新春ジャズイベントとして恒例となったデキシーランド・ジャズ・ジャンボリーが1月12日（土）、目黒パーシモンホールで華やかに開催、超満員のデキシーファンで賑わった。ハッピー・ジャズが健康にも役立っているのか、11年間を通じてほぼ全員

メンバーが変わらず、元気いっぱいのデキシー界、デキシーセイント、デキシーキングス、デキシーサミット、デキシーキャッスル、デキシージャイブに北村英治さんの特別ゲスト。毎年恒例の全バンド共通のテーマ曲は、今年は「月光値千金」。今年4月に90歳を迎えられる北村英治さんも元気いっぱいのプレイを披露。中川喜弘さん編曲の全メンバーによるデキシー・ビッグバンドも迫力一杯にスウィングした。元号が新しく代わる2020年も、ジャンボリーは1月11日、目黒パーシモン・ホールで開催される。



ご寄付と嬉しいお手紙 ありがとうございます

◆宇都宮スイング・ハード・オーケストラ

リーダー吉原郷之典様(会員) 136,909円

ジャズの街宇都宮を代表するビッグバンド、スウィング・ハード・オーケストラの定期コンサートで、毎年ニューオリンズ支援のご寄付を募り贈ってくださり、ありがとうございます。

◆Hiroshi Hasamoto 様(浦安市) フェイスブックで！
お誕生日おめでとございます！ますますお元気に楽しいジャズの伝道師として頑張ってください

会いたい。来日中のサッチモを夕食に招待したいのだがどうだろうかという話。できればクリスマス・イブを共にしたいと熱心だったという。

竹中氏がサッチモの宿舎だったヒルトン・ホテルに出かけていくと、運がいいことにロビーに降りてきたサッチモに出くわした。サッチモは持参した美空ひばりのレコードを受け取り、レコードを聴いたうえで翌日には返事をすると答えた。翌日、サッチモ上機嫌で、こんな逆提案をしてきたという。

「ミスひばりの店には行けない。そのかわり私が招待しよう。男性が女性を招待するのが礼儀だからね。一緒に1964年のイブを過ごそう。こういう絶好の機会にワイフと一緒にするのは残念だが」とサッチモは片目をつぶって見せたようだ。

しかし、ジャズの王様と美空ひばりとの出会いは、結局のところ実現することはなかった。拳銃の不法所持で弟が逮捕され、ひばりはその年のクリスマスイブを、弟が経営する横浜のクラブ「おしどり」で歌わなくてはならなかったからだ。

サッチモがひばりに残した 心温まる手紙

サッチモは「ハロー・ドーリー！」のサイン入りLPレコードに添え、こんな手紙を残して日本を去っていったという。

ネットで見つけた、サッチモちよっという話 美空ひばりとサッチモ 心の交流

ネットの Tap the Pops というページに掲載された音楽プロデューサー佐藤剛さんの記事『ルイ・アームストロングが美空ひばりに残した手紙とレコード』が素晴らしい。反骨のルポライターとしても知られる竹中芳氏の著書、『完本 美空ひばりの』からの情報。



ひばりと親交のあった竹中氏は、ひばりが歌ったジャズのLPを聴いているときに、ふと『彼女に黒人霊歌をうたわせたら』と思い、マハリア・ジャクソンのレコードを送ったという。しばらくしてリサイタルで彼女が歌った『ダニーボーイ』を聴き、マハリアのフィーリングを見事に自分のものになっていることに驚愕したという。

ご本人曰く、「ひばりは、おそらく私のことを‘へんなジャーナリスト’だと思ったにちがいない。突如としてレコード持ってあらわれては、‘歌いなさい、ジャズを歌いなさい’と言って帰るのである。」

そんな中「ハロー・ドーリー」が大ヒットし、ルイが1964年12月来日した。竹中氏のもとに、美空ひばり本人から電話がかかってきたのは12月17日、ルイ・アームストロングに

敬愛する日本の歌の女王・ひばり

私はあなたが、貧しい下町の出身だということを知ってに聞きました。そして、まだ10歳にならない少女の時から、生きるために歌をうたってきたということも聞きました。それは、大変私自身の体験と似通っているように思えます。音楽は、そういう場所と人生から生まれるもののようなのです。会うことのできなかつたことを、たいへん残念に思います。もし私が、もう一度日本を訪れることがあったらぜひ訪ねて来てください。その時、良い食事と良い音楽を共にしましょう。神のめぐみと歌の心がいつも、あなたの上にありますように。

60年前、中学生だった夏休み、映画「五つの銅貨」を見て感激し、映画のサントラ盤(ドーナツ盤)を小遣いで購入、ルイ・アームストロングとダニー・ケイの「聖者の行進」を毎日聴いていました。早稲田大学に入学、ニューオリンズ・ジャズ・クラブに入部して、外山喜雄先輩が吹くルイ・アームストロングの「ホット5」のトランペット演奏を部屋で聴いてその素晴らしさに驚きました。大学卒業後、ニューオリンズの外山夫妻と同じアパートの一室に住み、毎晩プリザベーションホールでニューオリンズ・ジャズを聴きました。日本に戻っての住まいは浦安。東京デイズ・ニールランドで演奏する外山夫妻も浦安にお住まいで、外山夫妻とジャズとサッチモについて夢を語り合いました。そして日本ルイ・アームストロング協会を設立に参加、以来間もなく25年。

ケニー・オーリンズのハリケーン被害と東北大地震へのサポート、楽器のプレゼント、サッチモ祭り、例年での多くのミュージシャンの記憶、そしてWJFの活動を通じて、多くのジャズファンと交流し、また若い人々にもサッチモの魅力伝えてきた25年の魅力。感無量！(山)